



済生会熊本病院 90周年記念誌

発行日：2025年9月

発行元：社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院
院長 中尾 浩一

編集：経営企画部 経営企画室

済生会熊本病院 90周年記念誌

● 理念

医療を通じて 地域社会に貢献します

質の高い医療を済生のところとともに

私たちは医療を通じて保健・福祉との連携を図りながら、地域社会に貢献します。
「済生」とは、生(いのち)を済(すく)うこと。
質の高い医療をやさしさとぬくもりのあるところで提供していきます。

● 基本方針

救急医療

専門医療チームが24時間迅速に対応します

高度医療

低侵襲治療・がん治療を推進し、医学の進歩をいち早く地域に届けます

予防医療

質の高い予防医療を提供し、地域の健康づくりを支えます

地域連携

医療・保健・福祉の連携を推進し、持続可能な地域社会を実現します

人材育成

確かな技術と共感のこころを持った医療人、社会人を育てます

私たちが貢献する「地域」とは、患者さんやその家族といった地域住民はもちろん、連携医療機関、行政といった全てを含みます。
済生会熊本病院が「地域」の中で絶えず必要とされるように、私たちは常に進歩し続けることで、基本理念である『医療を通じて地域社会に貢献する』を実現していくことを目指しています。

90周年記念シンボルマーク

数字の「90」を英字の「go」と融合させました。
100周年に向けての宣言を表しています。



済生会熊本病院
院長

中尾 浩一

済生会熊本病院創立90周年に寄せて

1935年(昭和10年)9月、熊本市本荘町に済生会熊本診療所が開設されてから、90回目の秋を迎えた。創立90周年、確かに一つの区切りではある。私たちの先達がこれまでに刻んできた歴史に思いを巡らす節目の年と言えるだろう。しかし、歴史は単なる過去の事実の積み重ねではない。過去の出来事は今日的に吟味されて、はじめて「歴史」として知覚される。

「歴史とは現在と過去との尽きることのない対話である」とは、英国の歴史家で国際政治学者でもあったE・H・カーの箴言である。歴史は折々の私たちの主観により創り変えられる宿命、ある種の危うさを負うものだ。私たち済生会の歩んだ道程もまた、その例外ではない。私たちの過去は今の光に照らされての評価を受け、私たちの今は未来からの審判を受けて、やがて新たな「歴史」となる。

一方で、私たちの今を、私たちの先達はどう見ているだろう。時代の変遷の中、様々な災禍を経て、済生会の「創立の精神」は守られただろうか。不透明で複雑化する社会の中で、私たちは何を变えるべきで、何を变えてはいけないのか。過去からの声に耳を傾け、内なる対話を重ねることも、私たちがこれから紡ぐ「歴史」の一部となるだろう。

済生会熊本病院創立100周年まで、あと10年。90周年は私たちの中期事業計画である「人と技術の融合による未来医療の創造」へと向かう新たな出発点でもある。様々な課題を抱えるこれからの10年だが、過去に学び、医療の今を支えるすべての方々との対話を通して、地域社会にしっかりと貢献し続ける病院として、次の世代に繋いで行きたいと思う。



創立90周年に寄せて － 未来への願いを込めて －

熊本県済生会 支部会長
済生会熊本病院 名誉院長

須古 博信

昭和10年の開設以来、済生会の理念である「施薬救療の精神」のもと、幾多の困難を乗り越えながら、地域の皆様とともに健康と福祉の向上に努めてまいりました。

このたび、済生会熊本病院が創立90周年という大きな節目を迎えることができましたのも、歴代の先輩方をはじめ職員の皆様のたゆまぬ努力と、地域の皆様の温かいご支援の賜物であり、心より深く感謝申し上げます。

私自身も50年余にわたり職員としてその使命の一端を担ってまいりましたが、今日このように90周年を迎えることができましたことに、深い感慨と誇りを覚えております。

この歩みが、次なる100年に向けた確かな礎となることでしょう。

済生会熊本病院が今後も地域医療の中核として、より一層の発展を遂げ、地域の皆様に信頼される医療と福祉を提供し続けられますよう、心より祈念申し上げます。



創立90周年を迎えて － 次の世代への伝言 －

熊本県済生会 支部長
済生会熊本病院 名誉院長

副島 秀久

昭和10年9月16日、本荘の片隅で小さな診療所が始まった。おりしも3年前には5.15事件が、1年後には2.26事件と言う軍部が起こしたテロリズムが、もはや制御不能となり、最終的には第二次世界大戦に突き進むことになる。まさに軍靴の響きが次第に大きくなる不安な時代に熊本における済生会がスタートした。こうした時代背景の下では平穩無事を望むのは難しい。戦災で焼失した済生会は花畑町の診療所を経て千葉城、現在の県立美術館分館に再建されたが、陸軍の兵舎を診療所に改造した急ごしらえだったため、冬は寒く夏は暑く、診療器材も乏しく、金もない状況であった。そこでさらに段山の地を得て、移転新築を目指す但これもまた、紆余曲折があり、すんなりといかず、1958年新築移転をはたしたものの相変わらず厳しい経営状況で、75周年記念誌によると給与もともに払えないありさまだった。

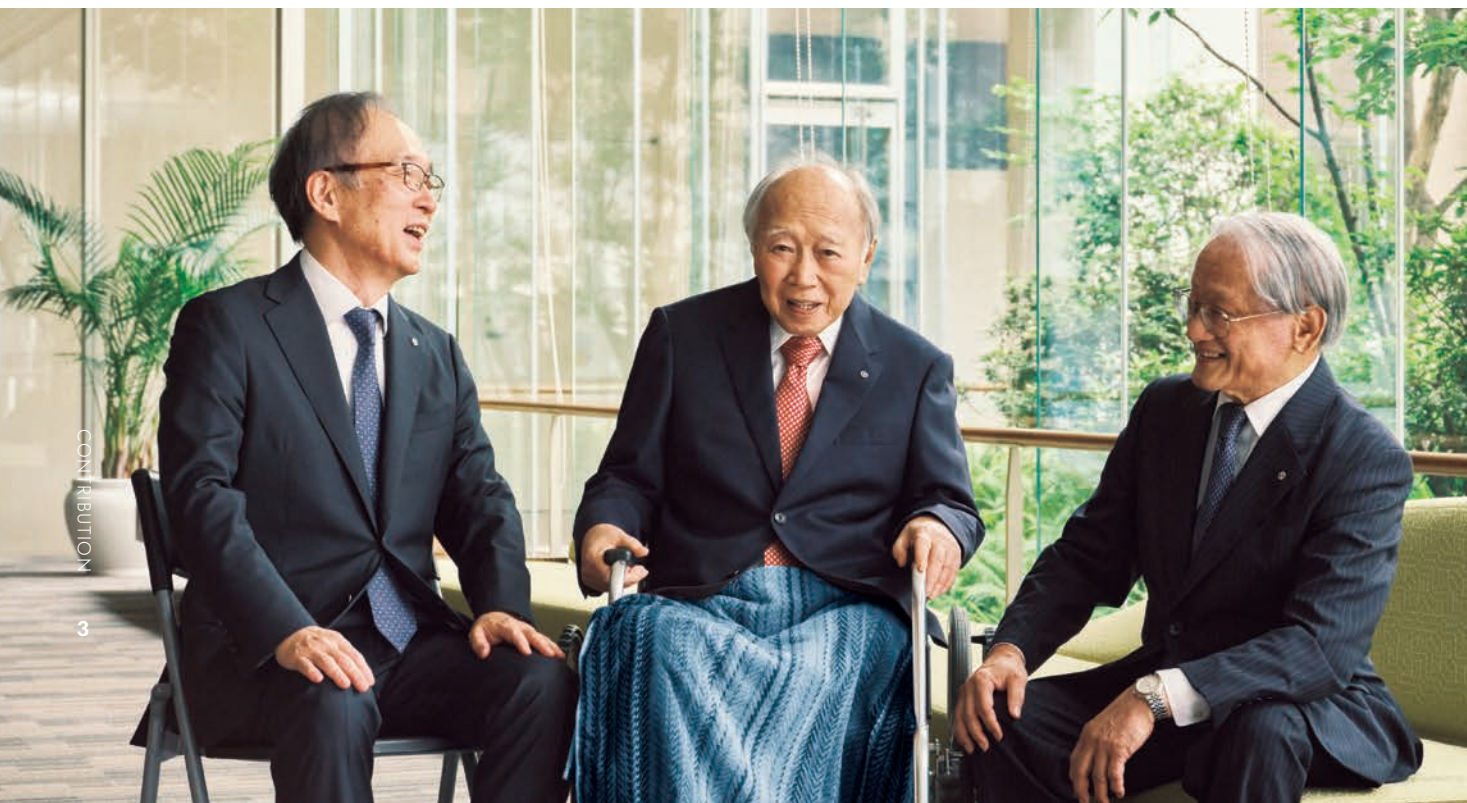
しかしこうした厳しい状況でもなんとか診療を継続しようという意気込みは十分で、巡回診療の開始や、胃の検診事業などを通して、少しずつ認知度も上がり、日本経済の回復に歩調を合わせるように経営も改善していった。特に段山時代の済生会をリードしたのは故三浦義一、故宮川全孝両院長だった。モータリゼーションが進むにつれ交通事故もうなぎ上りとなり、これに対処すべく救急を充実させ、日本で最初にCTを導入した。病棟は常に満床で、これを解決するために近見への新築移転を決断した。その先頭に立ったのが須古博信元院長である。その後もクリニカルパスの導入や地

域連携の構築などで新たな事業に取り組み、目覚ましい成果を上げ、急性期病院のトップランナーとなった。筆者も新病院構想から携わったがTQMの導入や、JCIなど忙しく充実した日々を過ごすことができた。院長在任中は東日本大震災や熊本地震などもあり、済生会グループの多大なる支援とともに、持ち前の団結力を発揮し無事に乗り越えることができた。

90年を改めて俯瞰すると時々のリーダーが苦難の中でも果敢に挑戦してきた歴史をみることができる。そこに共通するスピリットは、今、振り返って一言言えば「根性とプライド」だろう。特に段山のころの超長時間労働は普通で、夜中、休日の緊急などはいつでも来いという雰囲気があった。その時代の医療はこうした根性によって支えられていた。決して豊かではなかったが、根性とプライドは確実に醸成されていった。

もちろん時代は変わる。働き方改革の下では、こうした泥臭い根性論はもはや古いだけでなく有害、違法だ。でも当時はきついか過重労働などとは思わなかった。仕事自体が面白かったからである。特にみんなが共同して作り上げるクリニカルパスなどは寝る間も惜しんで議論した。

時代は変わったが「根性」の本質は変わらないだろう。これからはAIを駆使したスマートな根性が必要だ。組織の継続はリレーに似ている。社会のニーズに合わせてそれぞれの走者が力を合わせて目的地に進むレースである。次の世代が新しい済生会を作り上げるのを楽しみにしている。



1935

HISTORY OF
SAISEIKAI KUMAMOTO
HOSPITAL

● 私たちの90年の歩み

1935 ・済生会熊本診療所開所(本荘町)
太田正俊先生 初代所長に就任



1941 ・清水勇先生 第2代所長に就任

1943 ・病棟増築し、病院へ昇格

1945 ・熊本大空襲で病院全焼

1947 ・原庸蔵先生 第3代所長に就任
・花畑町に診療所再建



1951 ・公的医療機関開設指定を受ける
・千葉城町へ移転
・開誠先生 第4代所長に就任



1952 ・病院昇格
・「社会福祉法人恩賜財団済生会熊本病院」へ改称

1955 ・大塚茂先生 第5代院長に就任

1958 ・段山町へ移転
・蟻田重雄先生 第6代院長に就任
・整形外科開設



1961 ・短期人間ドック開始
・三浦義一先生 第7代院長に就任

1964 ・胃の集団検診開始
・救急医療協力病院の指定を受ける

1965 ・脳神経外科開設

1967 ・第20回済生会学会を熊本で開催

1971 ・人工透析開始

1975 ・胃腸科開設

1976 ・循環器科開設

1977 ・CTスキャン設置

1979 ・モービルCCU稼働

1980 ・病院増築



1983 ・心臓血管外科開設
1985 ・創立50周年記念式典開催

1986 ・麻酔科開設

1987 ・宮川全孝先生 第8代院長に就任
・許可病床400床へ

1989 ・救急部開設

1992 ・病診連携科開設

1993 ・新病院の理念
「医療を通じて地域に貢献します」
を掲げる

1995 ・近見へ移転
・須古博信先生 第9代院長に就任
・神経内科開設



1996 ・クリニカルパス導入
・災害拠点病院指定

1997 ・新入職員教育を目的に「済生塾」を開始
・済生会熊本病院OB会 第1回総会開催
・第1回院内クリニカルパス大会開催

1999 ・ガンマナイフ導入

2002 ・第1回熊本県支部評議員会開催
・新健診センターオープン
・TQMセンター開設



2003 ・病院機能評価認定
・臨床研修指定病院認定
・済生会みすみ病院開院

2004 ・済生会熊本福祉センター開所

2005 ・呼吸器センター開設
・腫瘍・糖尿病センター開設

2006 ・DPC対象病院へ
・地域医療支援病院認定

2007 ・外来がん治療センター開設



2008 ・地域がん診療連携拠点病院認定
・病院機能評価認定更新
・日帰り手術・治療室設置

2009 ・副島秀久先生 第10代院長に就任

2010 ・320列CT導入
・院内保育園「はあとランド」開設
・救急総合診療センター開設
・救命救急センター指定

2011 ・東日本大震災にDMAT隊派遣
・電子カルテ導入
・相談支援センター開設

2012 ・「健診センター」から「予防医療センター」に
名称変更

2013 ・手術支援ロボット「ダヴィンチ」導入
・ハイブリッド手術室設置
・救急ワークステーション開設
・JCI認定

2015 ・クリニカルパス大会100回記念講演会
・教育研修センター開設



2016 ・熊本地震発生

2017 ・タントクセン病院(シンガポール)との
人事交流契約締結
・JCI認証更新
・中尾浩一先生 第11代院長に就任
・包括診療部開設

2018 ・病院総合医認定施設取得
・患者サポートセンター開設
・リニアック導入

2019 ・ロボット・低侵襲手術センター開設
・JCI認証更新

2020 ・第20回クリニカルパス学会開催
・特定行為研修指定研修機関指定
・集学的がん診療センター開設

2021 ・総合腫瘍科、がんゲノムセンター、
緩和ケアセンター開設
・がんゲノム医療連携病院指定
・理念・基本方針改定

2022 ・カテーテル・低侵襲血管内治療センター開設
・JCI認証更新

2023 ・外来がん治療センターリニューアル

2024 ・第76回済生会学会・令和5年度済生会総会を
熊本で開催

2025 ・臨床研究センター開設

-2025

副島
秀久

熊本県済生会
支部長

1949年生まれ。
1975年熊本大学医学部
を卒業。1989年に済生会
熊本病院に人工透析科
医長として赴任。腎泌尿
器センター部長、管理運
営部長、副院長等要職を
歴任し、2009年に院長に
就任。2017年より熊本県
済生会支部長ならびに名
誉院長。

済生会熊本病院
90周年特別対談人に寄り添い、
時代を超えて。

命と向き合い、
時代とともに歩んできた済生会熊本病院。
その軌跡と次の100周年に向けた想いを、
病院の歩みを支えたお二人が語ります。

90周年を迎えて

副島 私は医師として50年近く歩んできましたが、その大半を済生会とともに過ごしてきました。90周年という節目を迎え、まず思うのは、よくここまで来たな、という素直な感慨ですね。須古先生から院長職を引き継ぐときに、「これからが大変だよ」と言われましたが、その言葉のとおり、道のりは平坦ではありませんでした。でも、職員一人ひとりの努力と、地域の医療機関の支えがあったからこそ、今があるのだと実感しています。

中尾 私が済生会熊本病院に赴任したのは、近見に移転した後です。諸先輩方から聞く話の中で、段山時代は昭和らしい情熱や、職員同士の家族的な温かさが溢れていた時代だったと感じています。その空気が、今の当院の基盤を形づくったのだと思います。

中尾
浩一

済生会熊本病院
院長

1960年生まれ。
1985年熊本大学医学部
卒業。1995-97年に米国
コロラド大学で研究員を
務め、1997年から済生会
熊本病院に勤務。2007
年から循環器内科部長、
2012年から副院長を歴
任し、2017年4月より院
長に就任。

副島 その通りですね。大変なことも多かったですが、無事にこの90周年を迎えられたことは、誇らしく、嬉しい気持ちでいっぱいです。

中尾 副島先生のお話を伺っていると、改めて歴史の重みを感じます。私は赴任して28年ですから、90年という長い歴史の中では後半しか見ていませんが、本荘町、段山と続く60年の積み重ねの延長線上に、今の私たちがいる。これを忘れてはいけませんね。

副島 まさに、その通りです。

中尾 90周年では、近見移転後の30年に焦点が当たりがちですが、それ以前の歴史にもきちんと光を当て、次の100周年に向けたスタートになるような年にしたいと思います。

先人たちへの感謝

副島 昭和30年代の済生会熊本病院は、経営的に非常に厳しい時代でした。給与も月給ではなく週給で支払っていたほど、資金繰りが逼迫していたそうです。そんな中、当時の院長だった三浦義一先生が、自ら資金をかき集め、病院を支えられたという逸話が残っています。

中尾 私も、三浦先生は歴代院長の中でも特に印象深い方だと感じています。鹿児島のご出身で、情熱をもって病院経営に取り組まれていらっしゃったんですね。

副島 そうです。まさに“鹿児島人気質”を感じさせる、懐の深い方でした。30年近く院長を務められ、国内でいち早くCTを導入するなど、先進的な取り組みにも尽力されました。私利私欲をまったく感じさせない方で、常に現場の声に耳を傾けておられたのがとても印象的でした。

中尾 須古先生の実存も欠かせませんよね。

副島 須古先生は、日本で初めてクリニカルパスを導入され



たり、日本クリニカルパス学会の初代理事長を務められたりと、質の高い医療を目指して尽力されました。

中尾 先生方の先見性と行動力が、今の当院の礎を築いたことは間違いありません。私もその精神を受け継いでいきたいと思います。

「済生会で働く」ということの重み

中尾 明治天皇の思いから生まれた済生会は、日本にとって特別な社会福祉法人です。2011年、東日本大震災の直後に済生会の創立100周年記念式典が明治神宮会館で行われました。天皇皇后両陛下（現・上皇上皇后両陛下）をはじめ、内閣総理大臣や衆参両院議長、厚生労働大臣などがご臨席されていた場に私も参列し、「済生会がいかに関皇室にとって大切な存在か」を肌で感じました。

副島 皇室とのつながりの深さが、済生会の特別さを物語っていますよね。

中尾 そう思います。2024年1月には熊本で済生会の全国総会を開催し、秋篠宮皇嗣殿下をお迎えするという貴重な機会もありました。済生会で働くということは、歴史と誇りの中に自分がいるということ。そのことを改めて職員の皆さんに実感してもらえるような90周年にしたいですね。

「治す医療」から「支える医療」へ

副島 私が院長職を引き継いだ頃は、バブルの名残があって、まだ人口も大きくは減っていませんでした。でも、今は地方の人口減少が目に見えるようになっています。高齢化も急速に進み、以前のような「治して終わり」の医療ではなくなってきました。

中尾 高齢者が増え、「治す医療」から「支える医療」への転換が求められていますよね。同時に、デジタル化や医療倫理の変化など、社会も大きく動いています。今までの延長線上ではない、別の選択肢を考える時期に来ていると感じます。

副島 社会が大きく変化の中で、「理想の医療」をどこに置くかは難しい問題です。でも、どんなに高い理想を掲げても、社会のニーズに合わせて変化しなければ、病院は生き残れな

い。今こそ、時代に合わせた先取りの姿勢が求められていると思います。

中尾 だからこそ、私たちが今やるべきことは、激変する社会に対して「知恵」で対応することですね。感情や慣習に流されず、丁寧に議論を重ね、次の世代に向けた医療のあり方を考えていきたいと思います。

「共生」と「創造性」で未来を拓く

中尾 済生会は昭和27年に社会福祉法人として位置づけられました。「無料低額診療事業」や「なでしこプラン」などの活動は、まさに設立目的そのものです。当院でも1割以上の方が自己負担ゼロで診療を受けており、非常に大切な取り組みです。

副島 そうですね。地域共生社会を実現するためには、弱者や障がいのある方もできる限り普通に生活できるように支えていかなければなりません。当院でも障がいのある方々に清掃業務などに携わっていただいているのですが、それが職員の意識にも良い影響を与えていると感じています。

中尾 福祉は「助けてあげる」慈善ではなく、社会の安定を支える仕組みです。明治天皇が済生会創設を指示されたのも、社会秩序を保つためでした。これは「ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）」の原点とも言えます。

副島 その通り、共生は理想論ではなく、社会の安定のために必要な仕組みです。済生会熊本病院も、地域の医療機関との協調がなければ成り立ちません。特にコロナ禍では、それを身にしみて実感しました。

それから、AIやDXの進展も、将来を見据える上で重要なテーマのひとつ。AIは常識的で有益な回答ができるため、正しく使えば医療現場でも有用です。その一方で、使いこなす側の

リテラシーが必要だと感じています。

中尾 医師に必要なのは「技術」「科学」「芸術性」。技術と科学は学べますが、AI時代では特に感性、芸術性が問われます。単純作業がAIに置き換わる中で、人間だからこそ発揮できる価値が重要になるでしょう。

副島 いわゆる、創造性や感性といった“アートの領域の力”ですよね。事務的な作業はAIが担うようになり、本質的な人間の役割が問われる時代になりますね。

次の10年を担う人たちへ

中尾 この90周年からの10年は、100周年へ向かう極めて重要な期間です。昭和10年に開設された当院が、新しい時代に対応しながら進化していくには、挑戦と守りのバランスが不可欠。コロナや物価高騰などで「守り」に重点を置かざるを得ない時期もありましたが、これからの時代は「攻め」の姿勢が必要になるでしょう。

副島 そうですね。新しい挑戦に向かっていけるよう、私たち



も経験や知見を活かして支援していきたいと思います。

中尾 医療の本質を見失わず、社会との連携を深めながら、未来に向けての準備を進めていくことが求められますね。

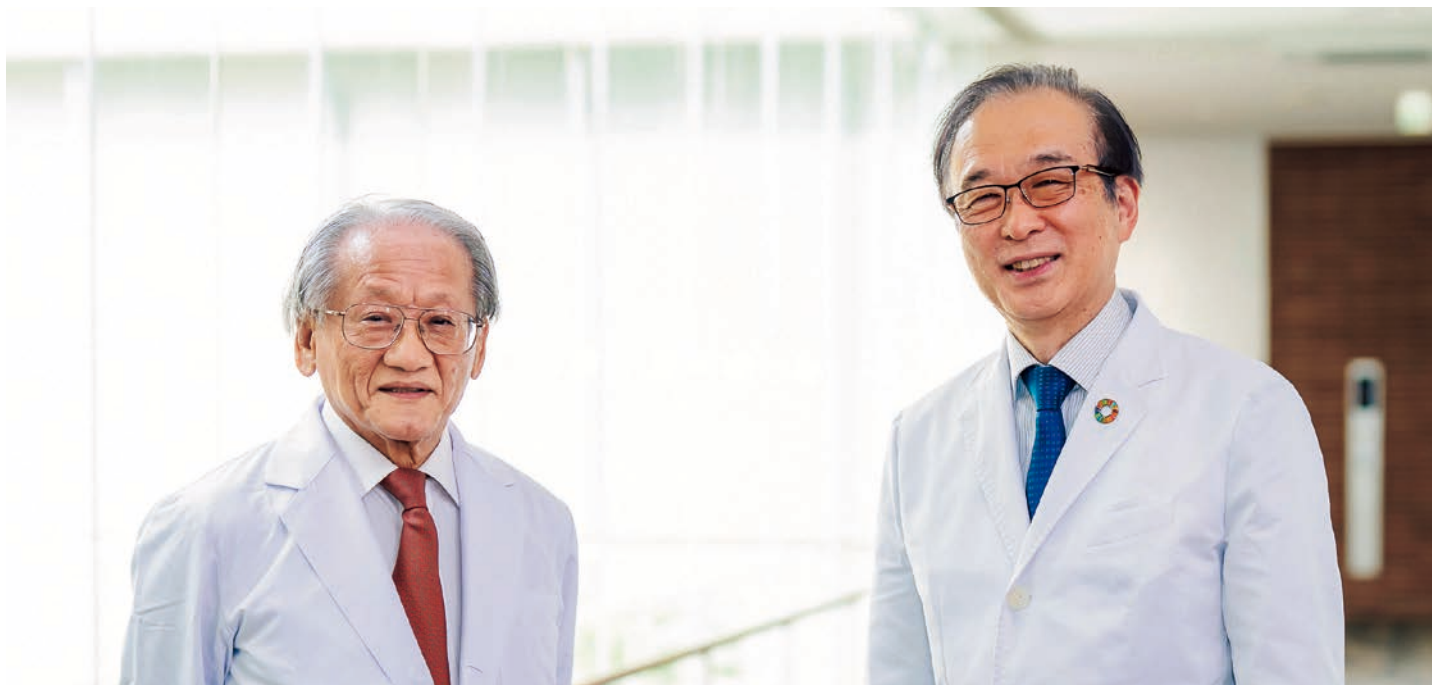
副島 私たちの時代は、朝から晩まで、休日も働いて医療を支えてきました。でも今は違います。限られた時間の中で、いかに高い成果を出せるかが問われる。つまり「生産性」の時代です。もしかしたら将来的には週休3日、4日になる可能性もあります。では、残りの時間をどう使うのか。私は今からでも、自分の人生の楽しみや学びを見つけておくべきだと思います。

中尾 同感です。しっかり働いて、それ以外の時間をどう使うか。そこが本質ですよね。多くのビジネスが、その“余った時間”を奪いに来ています。時間の本質は「いのち」。だからこそ、自分の成長や人生の価値を高めるために使うか、ただ消費して終わるのか、そこが分かれ道になる。自己投資のために時間を使う人は、自然とアウトプットも増えていくと思います。

最後に

中尾 日々患者さんと向き合ってくれる職員の皆さんに、心から感謝しています。どんなに環境を整えても、人の力がなければ病院は成り立ちませんから。

副島 本当にそう思います。皆それぞれが背景を抱えながらも、仕事では自分の役割をしっかりと果たしてくれている。皆が気持ちよく働けるようにしたいし、人生を楽しんでほしい。そのためにも、時間の使い方を大切にしてほしいと願っています。



100

90年間つないできた 志のバトンを、 私たちが、次代へ。

地域に寄り添い、人を想い、実直に医療と向き合ってきた90年。
その歩みを、次の100周年に向けてどうつないでいくのかー。
各部門の責任者が、未来への意志を言葉にしました。
積み重ねた日々を糧に、これからの挑戦が始まります。

100周年に向けて

創立90周年の感謝、そして100周年へ

1935年の創設以来、地域の皆様の温かいご支援のもと、90周年という節目を迎えることができたことに深く感謝申し上げます。これまでの歩みは、患者さんに寄り添う医療の実践と歴代職員の献身的な努力によって築かれてまいりました。100周年に向けた次の10年は、AIの加速度的な進化により、どのような方向へ進むのか想像することは難しいですが、地域連携や人材育成をさらに強化して、より安全で質の高い医療を目指してまいります。当院理念である『医療を通じて地域社会に貢献します』の通り、次の10年も地域に貢献できる病院として、さらなる飛躍を遂げることを願っています。今後とも皆様のご支援とご厚情を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

副院長 / 麻酔科上席部長
原 武 義和



5/9と2/5の記憶

今年、当院は創立90周年を迎える。来年は私が所属する循環器内科の開設50年の節目の年。目度さから言えば中途半端な90年より半世紀の方が上だ。さらに不肖、坂本は2026年、勤続20周年の表彰を受ける(はず)。これも大して目度くない。
この10年、当院(当科)はそれまでの80年(40年)とは全く異なった活動を行うことになった。未知の感染症や思わぬ自然災害への対応を強いられ、医師の労働環境改善と言う難題に取り組むことにもなった。新しい治療薬やカテーテル治療の登場により、これまでなすべ無く見守ることしか出来なかった超高齢者の心疾患を上手く治療できるようになった。そう考えるとこれからの10年、どんな変化が我々に訪れるのか想像すら出来ない。ただ「医療を通じて地域社会に貢献する」と言う当院の理念は今後変わらない。それに基づき行動してきた5/9及び2/5の記憶を確実に次世代に伝えることで、間違いなく目度い100周年を迎えたい。

副院長 / 循環器内科上席部長 / 医療情報部長
カテーテル・低侵襲血管内治療センター長
坂 本 知 浩

外科

済生会熊本病院外科センターは熊本県有数のhigh volume centerとして、これまで地域に根ざした外科診療を行って参りました。現在当科は10人体制で診療にあたっており、年間1,000例を超える外科手術を行っております。当科は、①低侵襲手術の促進、②高難度肝胆膵手術の実施、③断らない救急外科、を3本柱として、日々の診療に邁進しております。消化管領域、肝胆膵領域ともに最先端のロボット支援下手術などの低侵襲手術を含む「高度最先端医療」を積極的に実施しております。また当院は熊本県に2病院のみの肝胆膵高度技能専門医修練施設(A)に認定されており、高難度肝胆膵外科手術も多数行っております。救急領域においても低侵襲手術や最先端技術を導入し、地域における急性期病院としての「断らない救急」を実践しております。地域・病院の発展に貢献するべく、「高度最先端医療」と「断らない救急」を提供していくため、診療科一同邁進して参ります。今後とも、ご支援ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

外科部長
今 井 克 憲



消化器内科

済生会熊本病院消化器内科は、これまで救急医療と内視鏡治療の両分野において熊本をリードする中核的存在でしたが、近年深刻な医師不足・高齢化に見舞われています。働き方改革は、医師の生き方・考え方を变化させ、当科だけでの持続的で自立した医療の提供は難しい時代へと入ってきました。社会の救急医療や高度な専門治療へのニーズに応えるためには、熊本大学をはじめとした拠点病院と協力・連携・交流を図ることが重要と考えています。日々進歩する最新の医療技術を取り入れながら、消化器内科医師全員が一丸となって患者さん一人ひとりに寄り添う温かな医療を提供し、これまで以上に熊本の地域医療の未来を支えてまいります。

消化器内科部長
庄野 孝



呼吸器内科

2024年に創設20周年を迎えた呼吸器内科は、現在12名（呼吸器専門医10名）のスタッフ数を数えています。年間400名を超える誤嚥性肺炎を含む肺炎や急性呼吸不全の救急対応、エビデンスに基づく肺癌診療体制の確立、そして間質性肺炎を含むびまん性肺疾患の診断・治療体制の充実に結びついています。地域の患者さんに最新医療を提供するという観点から、各疾患の臨床治験や臨床試験の実施にも力を入れ、年間10件を超える臨床治験を行っています。今後も実地診療および臨床治験・試験の充実により地域医療に貢献したいと思います。

呼吸器内科部長 / 臨床研究センター長
一門 和哉



当科では年間約1,300例の入院と1,400件の手術を行い、大腿骨近位部骨折に対しては早期手術とチーム医療により質の高い治療を提供しています。人工関節置換術では術中ナビゲーションを活用し、骨盤や関節内骨折にはポータブルCTを用いて整復精度と安全性の向上に努めています。今後は骨折リエゾンサービスの充実や低侵襲手術の推進を通じて、外傷治療および地域高齢者医療にさらに貢献し、100周年に向けてより信頼される整形外科を目指します。

管理運営部長 / 整形外科部長 / リハビリテーション科部長
安樂 喜久

整形外科



総合腫瘍科は専門性の異なる多様な医師にて構成されており、がん治療の三本柱である手術療法・薬物療法・放射線治療を一つの診療科で行うことでシームレスな医療を提供することを目的に2021年に創設されました。手術療法では高度医療であるロボット手術を推進し、薬物療法および放射線治療ではエビデンスに基づいた最新かつ最適な治療を提供しつつ、新たなエビデンスを創出すべく臨床試験にも積極的に登録しています。また、がんゲノム外来や遺伝カウンセリング外来、総合腫瘍外来など新たな取り組みも進めつつ、増え続ける外来薬物療法件数に対して外来がん治療センターの改修によりキャパシティの拡充を図ってきました。今後も「がんと言えば済生会」をスローガンとして、地域のそして県民の皆様には選ばれる病院を目指して行く所存です。

総合腫瘍科部長
坂本 快郎

総合腫瘍科

呼吸器外科

済生会熊本病院呼吸器外科は、2005年に菅守隆先生をセンター長とした呼吸器センターが開設され、翌2006年に熊本大学呼吸器外科より吉岡正一先生が招聘されたことにより始まります。2008年Hi-Visionによる完全鏡視下手術の導入、2016年3D内視鏡を用いた鏡視下手術への移行、そして2018年県下初のロボット肺癌手術開始と、その時代の最新技術を取り入れ、安全確実な低侵襲手術に取り組んで参りました。当初年間90例程度であった手術症例も、昨年度は290例行わせていただいております。

これからも地域の医療機関、多科と密に連携を取りながら、肺癌、気胸、縦隔腫瘍を中心とした様々な呼吸器・縦隔疾患に対する外科治療を行い、より信頼される呼吸器外科を目指します。

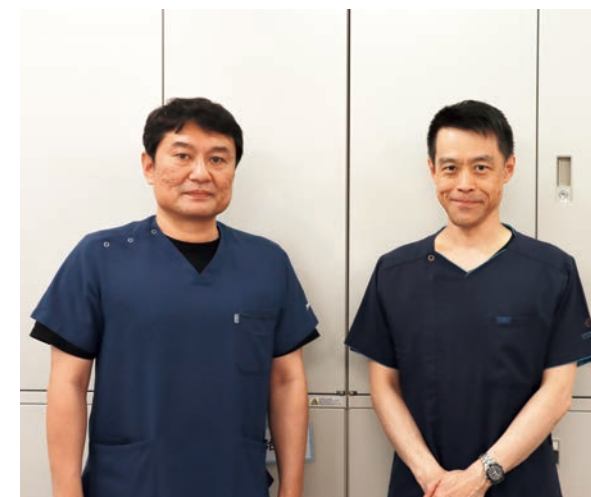
呼吸器外科部長
岩谷 和法



糖尿病内科

糖尿病内科は1995年の近見移転の際に野上哲史先生（現熊本第一病院名誉院長）を部長として発足しました。私は2004年に赴任し星乃明彦医師とともに糖尿病診療に当たっています。当科外来では主にインスリン治療中で血糖コントロールが不安定、がんやその他の疾患で他科併診中、重症合併症を有する患者さんなどを診療中です。先生方からのご紹介や健診後の受診に関しましては、患者教育と適切な薬剤調整を行った後、ご紹介元を中心に積極的に逆紹介させていただいています。最近の糖尿病診療は大きく様変わりしており、特にインクレチン関連薬や持続血糖測定機器などの開発により、これまでより更に踏み込んだ治療が行えるようになっています。重症合併症によるQOL低下を未然に防ぐためにも、糖尿病診療でお困りの際にはいつでも当科へご相談いただけましたら幸いです。

糖尿病内科部長 / 栄養部長
松尾 靖人



腎臓科・血液浄化室

血液浄化室は昭和46年(1971年)8月に開設され、故・原俊彦先生、副島秀久先生、町田二郎先生へ引き継がれ、現在は私が4代目で腎代替療法導入、入院透析患者さんの管理、院内外発生の急性腎障害等の治療を中心に医師・看護師・臨床工学技士など多職種でチームワークよく業務に取り組んでいます。ところで熊本県の腎不全医療を俯瞰的にみると、血液透析の導入環境は十分整っていますが、腹膜透析導入については導入率・患者数ともに十分とは言いがたい状況です。当科は南九州唯一の腹膜透析教育研修施設として、循環動態に優しく在宅治療可能な腹膜透析のさらなる普及に貢献すべく活動していきます。関係する皆様方の御支援、御協力を宜しくお願いいたします。

腎臓科部長 / 臨床工学部門部長

副島 一晃



循環器内科

当科は1976年(昭和51年)に初代部長の早崎和也先生が循環器科を創設以来、49年間「最先端の治療を熊本の地へ」を基本理念に歩みを続けて参りました。冠動脈インターベンションの隆盛とともに技術を高めながら、2011年(平成23年)には、早くも心臓カテーテル検査50,000例を突破し、多くの若き循環器内科医の育成に尽力してきました。その後インターベンションは構造的心疾患へのカテーテル治療(TAVI, ASD, m-TEER)や不整脈に対するカテーテルアブレーションへとその領域を急速に拡げ、当科は両領域においても日本最大規模の治療部門を築いてきました。今後は高齢化に伴う心不全パンデミックに対応すべく、心不全診療の深化、精密化を図りながら、これからの10年も倦くことなく前に進み続ける集団でありたいと思います。

循環器内科部長

古山 准二郎



当科は泌尿器悪性腫瘍、副腎腫瘍、副甲状腺機能亢進症、泌尿器救急疾患、排尿障害の診療に尽力しています。当科の歴史で特筆すべきは、泌尿器悪性腫瘍に対するロボット支援下手術です。2013年に県内ではじめて前立腺癌のロボット支援下手術を開始し、2025年6月の時点で2,200例を行いました。術式を工夫し、合併症が極めて少なく、術後早期から尿失禁が少なくなっています。高悪性度・局所進行症例に対しても術前薬物療法を併用して手術を行い、良好な成績が得られています。また腎癌の腎部分切除術を470例、膀胱癌の膀胱全摘術を60例に行い、尿路変向も完全体腔内で行っています。未来の患者さんのため次世代を担う新しい術者を育成しており、今後も最新のロボット支援下手術を施行して参りますので、宜しくお願いいたします。

管理運営部長 / 泌尿器科部長 / ロボット・低侵襲手術センター長

渡邊 紳一郎

泌尿器科



脳神経外科は1965年に当時の三浦院長が診療を開始され、初代部長に賀来素之先生、以後桜間先生、野中先生、藤岡先生、西先生が部長を歴任され、現在私は6代目ということになります。先人の努力により、当院は脳神経救急疾患における基幹病院としてのブランドを保ち、県内外の患者さんの信頼を受け現在に至っています。未破裂脳動脈瘤の治療は当科のメインワークであり、この25年間の治療症例数は2,000例を超えました。脳血管内治療を加え、低侵襲かつ多様な治療を展開したいと思います。さらに、ガンマナイフ機器の低侵襲性を生かし、髄膜腫を含む脳神経外科領域の無症候性疾患の治療に積極的に取り組む方針を定めました。今後とも当院脳神経外科をよろしくお願いいたします。

脳神経外科部長

山城 重雄

脳神経外科

心臓血管外科

創立90周年を迎え、先人達のご苦労に思いを馳せ、労い、また支えてくださった近隣医療機関先生方に深く御礼申し上げます。今、在職できたことを喜び、誇りに思います。我々心臓血管外科は中島昌道初代部長が1983年8月に最初の開心術を施行され、三代目平山統一部長の下、更なる発展を遂げ、現在に至ります。急性大動脈解離、瘤破裂などの緊急手術に対応しながら、ステントグラフト治療、並びにまだ九州では施行施設の少ないロボット支援下心臓手術など低侵襲治療を中心に日々頑張っております。今後10年、心臓大血管外科治療の殆どを小さな創部から行う時代が来ると考えられます。我々は時代の最先端で愛情のある高度な医療を提供します。

心臓血管外科部長

押富 隆



脳神経内科

脳神経内科は1995年に済生会熊本病院が近見移転に伴い臓器別診療体制となった際に、脳卒中センターの内科部門として開設され、この春で30周年を迎えました。当初2名の神経内科医で脳梗塞の全症例を担当し、脳梗塞診療に超急性期溶注血栓溶解療法、神経超音波検査、早期リハビリテーション(安静度拡大マニュアルや脳梗塞クリニカルパス)などを導入しました。その後も脳梗塞入院数全国1位達成、静注tPA治験参加、近年は機械的血栓回収療法の推進など、常に最先端の医療を多くの方に届けることに努めてきました。

今後の10年に向けては、脳梗塞を含む神経救急疾患の診療継続はもちろんですが、認知症や頭痛などのコモンディージーズも含め地域の皆さんのニーズに答え、信頼される脳神経内科を目指します。

脳神経内科部長

米原 敏郎





救急科

平素より、地域の連携医療機関の皆様のご協力により、1日の救急患者数は30～40件、救急車搬送の入院率は60%を超え、質の高い救急医療の提供を継続できていることに深く感謝申し上げます。

近年は、当院でも、救急科スタッフの大幅な人員減少や医師の働き方改革に伴う勤務調整の難しさ、高齢者救急の増加に伴う諸問題に直面しながら、地域の急性期医療を支える要としての自負と責任を持ち、日々多くの患者さんと向き合っています。刻々と変化する、救急医療を取り巻く環境の中でも、持続可能な体制づくりと人材育成に力を注ぎ、100周年に向けて、より強固な地域医療連携と安心できる救急体制の構築を目指してまいります。

救急科部長

佐藤 友子

総合診療科

済生会熊本病院は創立75周年の2010年に熊本県第3番目の救命救急センターの指定を受けました。同年、総合診療科は救急科とともに救命救急センターを支える部署として新設されました。当院は特に成人の脳神経、循環器、呼吸器、消化器、泌尿器、外傷の6分野で専門性の高い診療を行ってきましたが、救命救急センターを受診する症例はこの6分野に属さない、あるいは複数の分野の疾患を有する患者さんが多く存在します。総合診療科および救急科は救急外来の初療を行うとともに、このような患者さんを入院で担当しています。今後高齢化の波が加速し、対象となる患者さんの増加が予想されます。地域の信頼に応えられるよう、更なる診療体制強化を目指します。

管理運営部長 / 総合診療科部長 / 教育研修部長

具嶋 泰弘

病理診断科

1/3を超える期間、病理医として勤務しました。病理診断業務や病理解剖を通して、多くの症例から勉強する機会を得ることが出来ました。研究業務に取り組むことはなかったですが、貴重な症例などは学会発表のみならず、必要に応じて論文掲載に尽力してきました。患者さんから学んだことを、次の患者さんに活かしていく、というスタンスで取り組んできた結果、消化器病理ではそれなりに成果を上げることが出来たと思っています。今後の病理診断業務に活かされることを期待したいです。近年、遺伝子検査が病理診断でも要求されているので院内での遺伝子検査も必要になってくると考えますが、どんなに多忙になるとしても症例1例1例を大切にする気持ちは忘れてはいけないと思っています。

病理診断科部長

神尾 多喜浩



済生会熊本病院創立90周年、誠におめでとうございます。この節目の年を迎えられましたことは、先人のたゆまぬ努力と、日々現場で尽力されている皆様の熱意の賜物であり、心より敬意を表します。私が当院に赴任して、本年で10年目を迎えます。この間にも放射線医学は目覚ましい進歩を遂げてまいりました。画像診断技術の高度化、AIの導入、タスクシフトの拡大など、放射線科としても常に最先端の技術を取り入れてきたつもりです。活気に満ちた多くの診療科に触発されながら、その可能性の広がりを日々実感しております。今後も、患者中心の医療を支える急性期病院として、さらなる発展を遂げてゆくことを心より願っております。次の100周年に向けて、済生会熊本病院がますます輝きを増していくよう尽力いたす所存でございます。

放射線科部長

重松 良典

放射線科

集中治療室

済生会熊本病院が創立90周年を迎えるにあたり、日々ICUに立つ者として、この長い歴史の中に身を置いていることの重みを感じます。集中治療室はもともと心臓血管センターICUとして設立され、私が入職した頃にはCCUと呼ばれ、循環器重症患者の治療の中核を担っていました。今では多様な疾患の重症患者さんが入室し、病院全体の集中治療機能を支える部門へと進化しています。人員不足により昨年度からOpen ICUとしての運用を余儀なくされていますが、日本集中治療医学会のデータでは全国的にも重症度が高いICUでありながら、死亡率は予測を下回る好成績を維持しています。これは多職種スタッフの献身と努力の賜物です。次の100周年に向けて、限られた資源の中でも質を落とさず、持続可能な集中治療を模索し続けたいと考えています。

集中治療室長

澤村 匡史



麻酔科・中央手術部

当院の麻酔科は、病院がまだ段山にあった1986年(昭和61年)に開設されています。当初は麻酔科医1名で、その年の手術件数は1,400例あまりでした。それ以来、徐々に麻酔科医が増員され、1995年近見に移転後は手術室数も増え、2000年には3,300例もの手術をこなすようになりました。その後さらに手術室を増設し、2005年には4,000例を突破しました。ここ数年はコロナの影響もあり、5,500例前後を推移しています。手術の内容も様変わりし、ダヴィンチをはじめとする内視鏡手術が全盛期を迎えている一方で、循環器内科や消化器内科からの麻酔ニーズも増えてきています。ただ麻酔科医不足はまだ当分続くことが予想されるため、人材確保により一層の努力が必要であるとともに、麻酔アシスタントCEおよび特定看護師と協力して安全かつ効率的に業務にあたりたいと考えています。

麻酔科部長

加藤 清彦



包括診療部

包括診療部は、副島秀久熊本県済生会支部長のご発案で、「日本版ホスピタリスト」を目指し、また日本病院会：病院総合医創出に先駆けて、2017年に初代部長の園田幸生先生を中心に発足しました。入院患者さんの多くが高齢者であり、主たる入院契機疾患以外に、基礎疾患を有し、また介護度も高いことが多く、病院総合医が、看護師、薬剤師、管理栄養士など多職種と連携し、患者中心のチーム医療を行うことで、より質の高い医療を実践しています。また、病院総合医は、特に育児中の女性医師やベテラン医師が、培ったマルチなスキルを発揮して、二刀流、三刀流の働き方をすることで、今後の医療に貢献していくものと考えます。包括診療部は、これからも患者さん一人ひとりに寄り添い、安心と信頼の医療を提供し続けてまいります。

包括診療部長 / 糖尿病内科診療技術教育部長

星乃 明彦



看護部門

私たち看護部は、「やさしさとぬくもりのある看護」を理念に、地域に根ざした高度急性期看護を提供してきました。知識や技術だけでなく、豊かな人間性を育む教育体制を整え、多くの方々の支援により築かれた看護の礎を大切に継承しています。時代の変化とともに、教育や働き方も柔軟に進化させながら、人とデジタル技術の良さを融合させた新しい看護の形を模索しています。変化する医療環境の中でも、「思いやりと専門性をもった、ぬくもりのある看護」にこだわり続けることが、私たちの誇りであり使命です。100周年に向けて、一人ひとりが輝ける職場づくりと、地域に信頼される看護の実現を目指して歩み続けます。今後ともご指導・鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

看護部長

牛島 久美子



外来部では、診療科医師・看護師・外来支援室・医療秘書室・各専門部門が連携し、外来運営を行っています。2024年度には「高度かつ専門的な外来の維持・強化」を目指し、シン外来プロジェクトを始動。診察枠や対応ルールの見直し、逆紹介の推進、システム導入による効率化を進めました。現在は、説明動画・電子サインの活用、紹介予約方法の改善など、患者経験価値を高める“究極のスマート化外来”の実現に向けた取り組みを進行中です。100周年に向け、専門性と効率性を兼ね備え、患者さんが安心・安全に受診できる外来を目指していきたいと思います。

外来運営部長 / 医療連携部長
心臓血管外科診療技術教育部長

上杉 英之

外来部



薬剤部は、調剤室・薬剤管理指導室・医薬品情報室の3室で構成され、現在54名の薬剤師が在籍しています。これまで、薬剤使用プロセスのあらゆる場面に積極的に関与し、チーム医療の一員として他職種と連携しながら、医薬品の安全管理と適正使用に取り組んできました。また、治療の高度化・複雑化が進む現状においては、救急・がん・感染症・栄養などの専門資格を持つ薬剤師を配置し、専門性を活かした業務を展開しています。今後の10年に向けては、医療DXの進展とともに薬剤情報の一元管理が進む中、薬物療法の開始段階を担う当院では、地域医療と連携した薬物療法の継続支援への関与がこれまで以上に求められます。薬剤部では、高度な薬物治療管理体制の整備、地域医療との連携強化、若手薬剤師の育成と専門性の向上、多職種との協働によるチーム医療の深化を柱に、今後も医療の質の向上に貢献してまいります。

薬剤部長

田上 治美

薬剤部

TQM部

高齢化や医療の複雑化に伴い、地域全体での連携が不可欠となる中、TQM(Total Quality Management)部は、「患者さんが安心して質の高い医療を受けられる環境づくり」を使命とし、医療の質と安全の向上に取り組んでいます。メンバーは医療安全・感染管理の専門家を含む、医師・看護師・薬剤師・検査技師・工学士・リハビリ・事務職の多職種で構成され、患者さんの安全上問題となる事案の情報収集・分析・真因追求を通じて、有事の早期対応や再発防止策提案の支援を行っています。さらに、地域の医療機関とも病院訪問や会議を通じて積極的に意見交換を重ね、医療の質を高める活動を継続しています。TQM部は、院内の患者安全活動だけでなく、近隣の医療機関の安全と信頼性向上に貢献するパートナーとして、今後も連携を深めながら、患者中心の医療環境の整備に努めてまいります。

TQM部長

村中 裕之



臨床工学部門

当院は今年、創立90周年という節目を迎えました。これまで病院を支えてこられた先輩方に、心より感謝申し上げます。私たち臨床工学部門は、設立から約35年。病院全体の歴史と比べればまだ若い部門ですが、これまで着実に職能としての役割を果たしてまいりました。歴史は浅くとも、これからはより深く、病院だけでなく地域社会にも貢献できるよう、高度な技術力ときめ細やかな接遇力の向上に努めてまいります。100周年を迎える頃には、医療は大きな変革期を迎えていることでしょう。現在の主な業務は、生命維持管理装置(人工透析、人工呼吸器、人工心臓、ペースメーカーなど)の操作や、医療機器全般の保守点検ですが、今後は医療DXの進展に伴い、高度医療機器への対応だけでなく、医療情報に関する知識も不可欠となります。私たちもこの分野で活躍できるよう、日々研鑽を重ねてまいります。また、医療の質と安全をさらに高めるために、技術力の向上はもちろん、チーム医療への積極的な参画を通じて、「いのちのエンジニア」としての使命を果たしていきたいと考えています。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

統括技師長 / 臨床工学部門技師長

荒木 康幸



中央放射線部

当部署は63名の診療放射線技師が在籍し、高度急性期医療、救急医療、がん診療、予防医療に専門性の追求と幅広い知識を両立した診療に取り組んでいます。

近年の医療機器の進化は著しく、CT、MRI、PET-CTなどにはArtificial Intelligence(AI)を活用した画像再構成技術、AIを用いた病変検出も日常診療に用いられるようになりました。今から10年後はDigital Transformation(DX)が更なる進化を遂げ、我々が予想もしない診療スタイルになっているでしょう。しかし唯一変わらないのは人の心ではないでしょうか？10年後如何にDXが進歩しても、心のぬくもりは機械では作り出すことはできないでしょう。今から10年、質の高い医療技術を更に進化させ、当院の理念である、医療を通じて地域社会への貢献を済生のことと共に育んでいきたいと思います。

末尾となりますが、90周年を迎えることができたのは、済生会の先輩方のご尽力であり、そのご家族の支え、周囲の信頼のうえに成り立つものです。今の時代を預かる者として、次世代の医療者、済生会人に良い形でバトンを繋げる事ができるように、90周年の名誉をかみしめたいと思います。

中央放射線部技師長

沖川 隆志



栄養部

栄養部の業務は、時代の変化とともに給食管理に加え栄養管理も求められるようになり、2001年にはNST稼働、2014年からは管理栄養士の病棟配置を開始し、現在では全ての病棟に管理栄養士が常駐しています。「早期から質の高い栄養管理を行い治療に貢献する」を理念に掲げ、医師のタスクシフトに貢献できるよう、管理栄養士が主体となって、他職種と連携しながらきめ細やかな栄養管理を実施しています。給食業務では、病態に応じて安全・安心で満足度の高い食事を提供するべく、日々努力しています。一般外来では術前からの栄養管理を行い、がんセンターでは専門知識を有する管理栄養士が積極的に介入しています。今後も継続して栄養介入を行い、栄養状態の維持・改善に向け地域医療と連携を図り、患者さんの早期回復、社会復帰を支援できるよう取り組んでまいります。

栄養部技師長代行

松永 貴子



中央検査部では、正確かつ迅速な検査結果の提供を目指し、検査機器や試薬の精度管理、技師の教育に尽力してまいりました。2022年3月には、すべての検査部門で国際認証ISO15189を取得しました。また、救急外来や病棟でのエコー業務、集学的がん診療センターでの採血業務などの検査室外での業務に加えて、ハートチームカンファレンスへの参画や肝疾患コーディネーター、がんゲノム医療コーディネーターとしての臨床支援業務を幅広く行っています。今後は3日間のみ対応している救急外来支援業務の対応曜日を拡大するため、人員育成に取り組んでいきます。次の創立100周年に向けて、より信頼される検査室のため、品質の改善と向上に努力してまいります。

中央検査部技師長代行

田上 圭二

中央検査部



予防医療センターは2002年の開設以来、人間ドックを中心として事業を展開し、CT・MRI・AI内視鏡などの先進医療機器を導入することで、疾患の早期発見と予防に日々努めてまいりました。超高齢化社会を迎え、「人生100年時代」といわれる今日、予防医療は病気の予防を通じて生活の質(QOL)を向上させ、長い人生を健康で楽しく過ごすために大きな役割を果たします。また、予防医療は医療費の削減にも貢献する分野としてますます注目されています。「治療から予防の時代へ」変化する中、地域の皆様の健康を守るため、これからも時代の流れに即した先進的な予防医療を提供してまいります。今後とも、予防医療センターをよろしくお願いいたします。

予防医療センター長

満崎 克彦

予防医療センター

リハビリテーション部

段山町から近見町に移転した2年後の1997年にリハビリ部は開設しました。その歴史は90周年の1/3にも届きません。当初PT2名・マッサージ師1名から始動し、現在では45名(PT27名、OT11名、ST7名)のセラピストが「患者さんのストーリーに責任を持つ」の理念のもと急性期リハビリに従事しています。現在約95%の患者さんで入院(手術)翌日までにリハビリを開始し、その数は年間約8,000人に達し全国トップクラスです。10年後には高齢化がさらに進むことは間違いありません。一方で少子化の影響で人材の確保も課題となってきます。これまで以上に卒前教育に関わり当院の魅力を発信すると共に、より多くのレジデントを育成することで高度急性期病院に人材を確保できるよう取り組んで参ります。

リハビリテーション部技師長

山田 浩二



事務部門

済生会熊本病院は本年、創立90周年という節目を迎えることができました。事務部門を代表し、謹んでご挨拶申し上げます。事務部門は、歴代事務長のもと、医療制度改革への対応、地域完結型医療の推進、最新のIT技術活用など、時代の要請に応えながら病院運営を支えてまいりました。近見移転以降の30年においても、事務職員の役割は大きく進化しております。当院90年の歩みは、地域の皆様の温かいご支援とご理解なくては成し得なかったものであり、ここに深く感謝申し上げます。次の10年に向けて、私たちは社会の変化に柔軟に対応しながら、皆様に信頼され続ける医療機関として、より一層の発展を目指してまいります。皆様の変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

管理運営部長 / 事務長

田崎 年晃

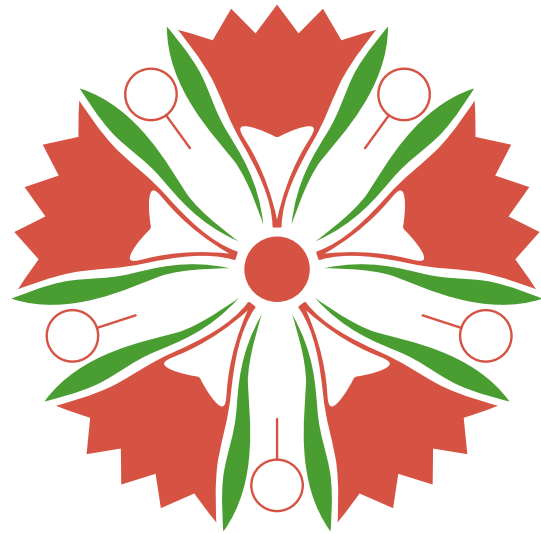


私たちの「今」



OUR PRESENT





いのちから、 幸せをつくる。



BRAND STATEMENT & TAGLINE

SAISEIKAI KUMAMOTO HOSPITAL

「想い」を確信に、未来への道標に。

熊本の人々にとって、済生会熊本病院はどんな存在でしょうか？

私たちの病院を受診する理由、受診したいと思わせるものは何でしょうか？

病院創立90周年を迎えるにあたり、いまいちど、私たち自身を見つめ直しました。

そして、地域の人々に「済生会熊本病院を受診したい」と思ってもらう理由、この病院が、代え難い存在であり続けるための「答え」は、私たちの病院の中、心の中にあることを改めて確認しました。

心の中にある、その想いを、確信に変えること、もっと鮮やかにすること。

10年後の創立100周年、その先の未来に向けて、さらに地域に必要とされる病院になるために。

病院や、自分の仕事を誇らしく感じるその想いを、言葉にしました。

それは、全スタッフ、地域の人々にとっての心の拠り所です。

100周年、未来に向けて歩む、私たち済生会熊本病院の道標です。

いのちから、幸せをつくる。

「命と健康」にまさる大切なものではありません。

どんなに金銭的に豊かでも、社会的地位が高くても、健康を損なえば、本当の豊かさを手に入れることはできません。

私たちの仕事は、人の一番大切なもの、

かけがえのない命と健康を預かることです。

その重く、高潔な使命を果たしていくために、日夜研鑽を続け、日々、高度な医療技術を追求しています。

弛まぬ向上心と努力で得た、医療人としての高い資質と、志があります。

命が起点。

一人ひとりの力を合わせた大きな「医の力」で、熊本の命と健康を守ります。

「命から」幸せを創造していきます。

【 BRAND STATEMENT 】

患者さんや地域の皆さんに対する私たちの「約束ごと・決意」を表現することば



しあわせ、さいせい。

済生会熊本病院が提供する価値の根幹である
「幸せ」に焦点を当て、
シンプルに力強く、病院が提供する価値を伝えます。

この言葉を胸に刻み、
私たち一人ひとりが誇りを持って医療に向き合い、
次の10年、その先の未来へと力強く歩みを進めていきます。

【TAGLINE】

私たちの普遍的な価値や想いを地域の皆さんへ分かりやすく伝えることば